

刀と信仰―刀剣と信仰の関わりについて―

角川ドワンゴ学園N/S高等学校研究部

人文科学グループ

池辺 莉々

一 はじめに

下の絵からは大勢の人が神輿を囲むように列をなし、賑やかな様が伺える。そこには子供や大人、人力車に腰掛けたいかにも身分の高そうな人、洋服を着たハイカラな人。明治三十六年五月二十八日、この華やかな祭りの列は、現在の羽田空港にあたる場所にあつた大きな社に向かう。この絵巻の中心に描かれた行列の中心の神輿には何が担がれているのだろうか。こんなにも賑やかな祭りが開ける身分の高い人間であろうか。それとも、神社に向かう行列であるから神様なのだろうか。この問いの答えは、絵巻の神輿の上にある。そこには、「三条宗近」と記されている。この神輿に担がれているのは、人でも神様でもなく平安時代に三条小鍛冶宗近によつて打たれた一振りの刀剣なのだ。

実は、現代でも多くの刀剣が、文化財や信仰の対象として社寺に納められている。それは本来武器である刀剣にとつては、あまりにかけはなれた用途のように思える。

そして何より刀剣とは、人間の作った物なのだ。

その刀と信仰の関わりについて辿っていききたい。そのために、かつての副葬品や、刀剣にまつわる逸話、奉納された刀などから探る。



目次

- 一 初めに
- 二 刀の伝来と信仰のはじまり
 - 弥生時代の副葬品としての出土例
 - 武器の形と信仰の関わり
 - 刀と信仰のはじまり
- 三 書物上の刀
 - 日本神話と草薙劍
- 四 奉納されて使われた刀
 - 八坂神社の大長刀と武人
- 五 使われて奉納された刀
 - 源義経と薄緑丸
 - 吉備津神社の備州長船秀幸
- 六 廃刀令後の刀への信仰
 - 廃刀令後の信仰と穴守稻荷の太刀
- 七 終わりに
- 八 今後の展望

二 刀の伝来と信仰のはじまり

刀の伝来について、初めに触れておきたい。

剣や、矛、日本刀の起源となるものは弥生時代前期に、中国大陆との交流を通じて取り入れたとされる。しかし、武器として伝わったそれらはいつから信仰と関わるようになっていったのだろうか。

● 弥生時代の副葬品としての出土例

銅・鉄製武器が伝来した弥生時代の有力者たちの墓からは玉や鏡、青銅器などの副葬品が出土する。弥生時代中期の有力者の墓として知られる福岡県福岡市の吉武高木遺跡3号木管墓の副葬品からは「細形銅剣・細形銅矛・細形銅戈・銅鏡・勾玉・管玉」と玉や鏡のほかには剣、矛、戈といった銅製の武器が見受けられる。当時貴重で高価なものであった銅製の武器を副葬品とすることは、権力や武力の象徴としての意味があると考えられる。信仰の対象ではないが、伝来してからかなり早い段階で銅・鉄製武器が大きな力を具体化する手段として使われていたことがわかる。

こういった武器に武器以外の意味を持たせることが、後の刀を信仰の対象とすることに通じていったのかもしれない。

● 武器の形と信仰の関わり

下の写真(B)(C)を比較してみてほしい。どちらも同じ銅製の矛で、出土した地域も(B)は佐賀県、(C)は長崎県としても近い地域となっている。一見してわかる違いといえはその形だ。写真だけでも(C)の方が、明らかに長さや幅などが大型である。(B)は長47.1cm・重量521gに対し、(C)は長84.0cm・重量2543gとその大きさの違いは明らかである。二つの矛には、もう一つ大きな違いがある。それは(B)は弥生時代中期、(C)は弥生時代後期のものだ。しかし同じ弥生時代という同じ時代区分の中で、こんなにも形が変化するものだろうか。しかも、時代がより進んだ(C)の方が大型化し、重量も増し矛としては戦闘に不向きな形に変化している。そこには武器と祭祀具という用途の違いがある。鉄製の武器が普及した弥生時代後期で、(C)のような矛は耐久性や、威力などから武器としての用途ではなく祭や神事の道具として威力より見た目を重視し、大型になっていったとされる。例には矛を出したが、銅剣・銅戈などの銅製武器も祭祀具として使うために、弥生時代後期ごろに大型化されていく。このことから弥生時代後期頃には、はすでに武器が祭や神事に直接的に関わっていたことがわかる。



● 刀と信仰のはじまり

多くの武器が古来より信仰に深く関わってきたことはわかったが、刀剣と信仰の関わりはいつ頃からなのであるうか。

日本最古の神社の一つである奈良県天理市にある石上神宮には古代の祭祀跡がある。明治七年に禁足地であるこの祭祀跡の中央から「内反素円頭大刀」という鉄製の刀が出土していると、大場磐雄「まつり」(1967)学生社の内容に記されている。その形が、古墳時代初頭に日本列島にも伝わったものに酷似しているため、古墳時代のもと考えられる。

このことから、刀剣が古墳時代ではすでに直接、信仰に関わっていたことがわかる。

戦うための道具として伝わったあらゆる銅・鉄製の武器たちは、伝来してからすぐに信仰と関わりを持つていたことがわかった。刀剣が反りを持ち日本刀の形になるより先に、信仰と深く関わり神聖なものとして関わってきたのは、

大陸より伝わった刀剣の切れ味を目の当たりにした日本列島の人々。彼らにとって、あまりに脅威を感じたのでしよう。人間を殺傷する金属製の武器は、縄文時代、日本列島には存在せず、弥生時代に大陸・朝鮮半島から伝来しました。特に、人体を瞬時に切断できる鉄製の刀剣に、当時の人々は強い力、脅威を直観したと思われれます。だからこそ、鉄の刀そのものに霊威を感じ、神への捧げもの、あるいは神聖な存在になったと言えます。

と、國學院大学 神道文化学部教授・國學院大学博物館館長の笹生衛氏(2016)は書いている。(一節下から五行目より)

武器と信仰が結びついたのがその威力だったのかは定かではないが、いずれにせよこの時代の武器と信仰の関わりが、後の刀と信仰の基礎を作ったと考えられる。

三 書物上の刀

古事記や日本書紀などの日本最古の書物と言われるものの内容では、刀剣についての記述も存在する。その特徴を見てみたいと思う。

● 日本神話と草薙劍

草薙劍くさなぎのつるぎとは、日本神話に登場する劍あまのむすひものつるぎで天叢雲劍あまのむすひものつるぎと同一視されている。そして、日本で最も有名な劍と言っても過言ではない。神話内でのこの劍の登場のし

かたというのは、日本列島を生み出した神、伊邪那岐神いざなぎのかみの息子たけはやすきのおのみことの建速須佐之男命たけはやすきのおのみこととが出雲国の八つの頭と八つの尾をもつ大蛇の怪物八岐大蛇やまたのおろちを退治した際に尾の一本の中を切り開くと草薙劍が出てくる、という何とも神秘的な話だ。

古事記序文によると、日本神話は文字で伝わったのではなく、口承で受け継がれてきたものを文字にしたものだそう。つまり、文字の読み書きができない者であつても日本神話には触れることができていたのである。

草薙剣は八咫鏡、八尺瓊勾玉と共に三種の神器として現代にまで伝わっているが、そこには一部の文字の読める人だけでなく多くの人に口承で神話を通じて、草薙剣は他の鉄製武器より、神秘的で強い力を持った特別な存在と認識されていたのではないだろうか。神話を通じてこの剣は、信仰の対象としての地位を定着させたのである。

四 奉納されて使われた刀

現代においても、多くの刀や剣・薙刀といった武器が社寺に収められている。そういった信仰に直接かかわる武器は古来より戦の道具とは違い使いやすさより、その神聖さに重きを置かれ祭祀などに使われる傾向にある。では、一度奉納され、神聖な道具となった武器が、もう一度戦の道具となるのはどう考えられているのだろうか。

● 八坂神社の大長刀と武人

おこなぎなた

京都で行われる祇園祭の長刀鉾という神輿はその名の通り、神輿の天辺の鉾頭に大長刀が取り付けられている。この神輿の鉾頭には現在、三条長吉作の複製の大長刀が取り付けられている。しかし、最初に取り付けられた大長刀は、三日月宗近などの数々の名刀を生み出した三条小鍛冶宗近によるものだった。その最初の大長刀は、三条小鍛冶宗近在京都府京都市内の八坂神社に、娘の病氣平癒を祈願し奉納したものだった。その大長刀はいつしか疫病邪悪を払うものとして、祇園祭の神輿に取り付けられることとなったのだ。

この大長刀にはもう一つ逸話がある。それは、鎌倉時代に使われたということだ。鎌倉時代にこの大長刀は神社から持ち出され、とある武人が愛用したそう。しかし、この大長刀を所持するようになってから、身の回りに不思議な現象が多々起こるようになった。その武人は、この大長刀は自分には身に余るものと恐れ、神社にこの大長刀を返したという。

この逸話が実際に起きたことなのかは、あくまで逸話の範囲をでないものだが、このエピソードによって「神のものを人が使うべからず」といった逸話が広まったことは事実だ。

このことから、奉納されて神聖な道具となった武器が、もう一度戦の道具として人の手によって使われることは、良いこととは捉えられない風潮にあつたことがわかった。

五 使われて奉納された刀

奉納された刀が使われることは、よくないと考えられる風潮にあったようだが、反対に使われた刀が奉納されることはどのように考えられていたのだろうか。

● 源義経と薄緑丸

薄緑丸は、蜘蛛切や吼丸などの色々な名を持つ。渡辺綱が茨木童子という鬼の手を切ったと伝わる鬼切丸と共に、清和源氏が代々継承したとされる太刀だ。平家物語の剣の巻などにも登場する。神社に奉納された刀剣の逸話としても、とても有名な話を持つ刀だ。源家に伝わった薄緑丸が、源為義から源義経の手に渡り、その後に義経が兄の源頼朝との不破解消を願う箱根権現に奉納されるというものだ。とても有名な話だが、これは室町時代に流行した幸若舞という曲舞の一種の剣讃談という演目の物語だ。

現在源氏に伝わる薄緑丸とされている刀は数振り存在するが、その中でも箱根神社にある一振りには「箱根山略縁起」によると義経が箱根権現に奉納したのちに別当行実が貸し出し、改めて源頼朝の手によって奉納されたとなっている。義経の手によってなぜ奉納されたかは定かではないが、源家の重代の宝刀の薄緑丸は奉納されることになる。

源義経や頼朝などの鎌倉幕府の中心となる立場の人物がその家の宝刀を奉納したということは、武器としての刀剣が神聖なものとして神社に奉納されるということが肯定されていたということをも裏付けるのではないだろうか。

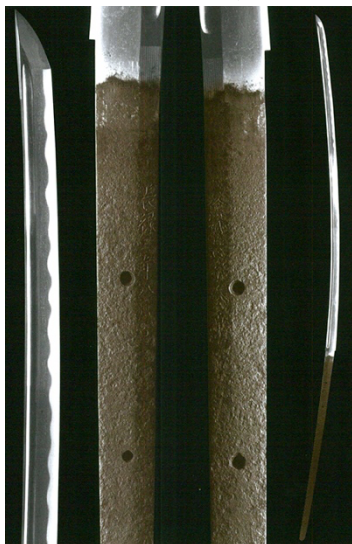
● 吉備津神社の備州長船秀幸

下の写真(㊦)は吉備津神社に収められている。室町時代の刀工、備前長船秀幸作の太太刀である。この太太刀は、三村氏や毛利氏などに仕え、天正十年の織田信長・羽柴秀吉らによる備中高松城水攻めで切腹した戦国武将の清水宗治によって奉納されたものとして伝わる。この太太刀には大きな特徴がある。それは、刃や棟に数箇所の刃こぼれや傷が残っていることだ。つまりこの太太刀は、実際に戦で武器として使用されたということだ。

神社の宝物殿などで見ることが出来る刀は、修復作業中に剃り上げなどで傷や刃こぼれが失われてしまっていることが多い。しかし、稀に傷が残っているものもある。実践で使われた刀が奉納されることは多くあつたのだ。

武器として戦に関わった刀が奉納され、神聖なものとして信仰に関わることが多くあることがわかった。つま

り、使われた刀が奉納されることは、比較的肯定的なことであつたと考えられる。また、現代までその時代に奉納されてきた刀がその神社などで所持・保存されている例が多々あることから、一度は武器としての用途で使われた刀でも、大切に神聖なものとして扱われていたことが伺える。



六 廃刀令後の刀への信仰

「ここまで、さまざまな刀剣や武器と信仰との関わりについて書いてきたが、「ここ」では最初の写真(A)の絵巻について再び触れていきたい。

● 廃刀令後の信仰と穴守稻荷の太刀

東京都大田区にある穴守稻荷神社には、「穴守稻荷御宝遷座式行列図」という絵巻の資料が所蔵されている。これは、明治三十六年五月二十八日に行われた、五辻家の三条小鍛冶宗近作の太刀を穴守稻荷神社に奉納するために運び込む列の絵だ。

大政奉還がなされ武士の時代が終ると、明治九年に勤務中の警察及び軍人以外の帯刀を禁止するという、いわゆる廃刀令が布かれた。これをきっかけに、徳川幕府が開かれ戦がなくなつた世の中で離れていく刀と人の距離はさらに開くことになっていく。刀剣は武器としての需要より、コレクターや財力を持つ者からの美術品としての需要が高まるようになっていった。そして廃刀令から約二十七年後、刀を取り巻く環境は大きく変わり、また人と刀は決して身近とは言えない存在になりつつあつたのではないだろうか。そのような時代の最中、子爵家から街の中心である神社に一振りの宝刀が奉納されることになった。その列に加わる人々は老若男女、身分関係なく描かれている。

この資料は、廃刀令後の世でも信仰を通して、刀と多くの人々との関わりが続いていたということ。また、明治時代においても刀への信仰が続いていることを表す貴重な資料となっている。

七 まとめ

「刀と信仰」というテーマの中で、弥生時代前期の刀の伝来時の出来事から、奈良時代に編纂された古事記、戦国時代の奉納された刀などをたどり、最後には明治時代という、刀が武器としての役割を終えた後の時代の出来事までの幅広い範囲の刀と信仰の関わり方を見てきた。

伝来当初は、祭祀用に形が変化していき、信仰の対象またはその捧げ物としての意味を多く担っていたが、刀が武器としてより定着した平安では武器としての形のまま信仰と関わっていたことがわかった。そして武士の世になってからは、武器と奉納される刀の境がより曖昧になったように見受けられる。そして、刀が武器としての役目を失われた廃刀令後でも、信仰と刀の関わりは途絶えることなく、現代でも多くの刀剣や薙刀などが社寺に所蔵されている。また、令和五年五月二十日島根県隠岐神社に現代の刀工月山貞利氏によって一振りの現代刀が奉納された。

このように、伝来当初から続いた刀への信仰は時代に合わせてその形式や姿を変化させながらも現代に続いているのだ。

また、刀自身も反りの深さや身の太さなど、用途に合わせてその姿を変えて行き、武器から美術品・祭祀具といったさまざまな用途や認識を人々に与え、刀と人との距離は変わったがいつの時代も刀は途絶えることなく人のそばにあることがわかった。

八 今後の展望

はじめに、及び六章で触れた写真①の絵巻に登場する、三条小鍛冶の太刀には続きの話がある。この太刀は昭和に起きた第二次世界大戦中まで、穴守稲荷神社に所蔵されることになる。しかし日本が敗戦し、①エの指示により穴守稲荷神社は羽田内からの即刻退去を命ぜられることになる。やむをえずこの三条小鍛冶の太刀を置き去りにして羽田から去ったが、後で回収に行った際にはもうそこにその太刀は無くなっていた。①エの刀剣接収とともに廃棄されてしまったのか、①エから誰かの手に渡ったのかはわからないまま、二〇一九年に絵巻物が見つかったことにより三条小鍛冶の太刀が穴守稲荷神社に奉納されたという出来事の断片的な像がわかるようになった。

この穴守稲荷の三条小鍛冶の太刀が、どのような理由で穴守稲荷に奉納されるようになったのか、またどのような人の手を渡ってきたのかを探ることは、穴守稲荷神社が戦前に与えた影響力や、その規模がより詳しくわかる材料になるだろう。そして、明治時代での刀への価値観や、多くが不確かな情報でほぼ伝説的に扱われている三条小鍛冶宗近の実態についても深く知るために必要な資料となっていくだろう。そのため、穴守稲荷神社にあったこの太刀がどのような物なのか研究することにした。

今回取り組んだ刀と信仰というテーマにより、この穴守稲荷神社の太刀を知るために、刀は信仰という視点において、どのように扱われてきたのかを確認するための、初歩的な課題として取り組んだ。

これからの課題の一つとしてまずは、五辻子爵家の明治時代付近の所蔵品目録から、いつごろどこでこの刀を入手したのか、穴守稻荷神社に關係する稻荷講や、親密な人物を調べ、どのようにして五辻子爵家と関わりを持ち、太刀が奉納されることになったかの経緯を明らかにしていきたい。

謝辞

今回この穴守稻荷神社の三条小鍛冶の太刀についての調査を始めるきっかけは、消失刀の調査をしたいがなかなか踏み出せない私が、羽田で飛行機に乗る前に偶然できた時間に、近くにあった穴守稻荷神社によることにし、そこに、たまたまあの絵巻があったという偶然が重なったことから始まりました。あの日、快くあの絵巻を見せてくださった穴守稻荷様。また、初めての本格的な研究に挑戦する私の地に足のつかないような計画をアドバイス・応援してください、はじめの一步となる今回の研究を現実味のあるところまで一緒に落とし込んでくださったアドバイザー並びに部員・卒部生の皆さま。また、大発表会や研究する機会をくださった研究部スタッフの皆さま。また、今回この紀要論文を書くにあたり大発表会で改善点・アドバイスをくださったポール・マーティン先生並びに審査員の皆さま。多くの資料を貸し出してくれた皆さま。歴史や刀に興味を持つきっかけを作ってくれた方に深く感謝申し上げます。

令和五年 五月三十一日

池辺莉々

画像参照・引用参照

- 写真(A) 六守稻荷神社「六守稻荷御宝遷座式行列図」六守稻荷神社資料室別館 2019.11.16. <https://anamori.jp/annex.html>(2023.5)
- 写真(B) 国立博物館所蔵品統合検索システム「中細型銅矛」ColBase https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tmm/J-37167?locale=ja(2023.5)
- 写真(C) 国立博物館所蔵品統合検索システム「広型銅矛」ColBase https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tmm/J-817?locale=ja(2023.5)
- 写真(D) 吉備津神社「大太刀 備州長船秀幸」吉備津神社太刀 <https://kibitujinja.com/about/tachi.php>(2023.5)
- 笹生衛 吉永博彰「なぜ刀は「神聖なもの」となったのか現代に続く名刀・本当の歴史 神への捧げものから生まれた日本文化 episode1」國學院大學メディアア 2019.6.25. <https://www.kokugakuin.ac.jp/article/123916> (2023.5)

参考文献

- 松木武彦「人はなぜ戦うのかー考古学から見た戦争」中公文庫 中央公論新社(2017)
- 国史跡吉武高木遺跡やよひの風公園 <https://bunkazai.city.fukuoka.lg.jp/yoshitaketakagi/>
- 東京国立博物館所蔵 中細型銅矛：国立博物館所蔵品統合検索システム (https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tmm/J-37167?locale=ja)
- 東京国立博物館所蔵 広型銅矛：国立博物館所蔵品統合検索システム (https://colbase.nich.go.jp/collection_items/tmm/J-817?locale=ja)
- 石上神宮 <https://www.isonokami.jp/>
- 大場磐雄「まつり」学生社(1967)
- 笹生衛・吉永博彰(2019)「なぜ刀は「神聖なもの」となったのか現代に続く名刀、本当の歴史」國學院大學メディア <https://www.kokugakuin.ac.jp/article/123916>
- 「古事記」新編日本古典文学全集(1) 小学館(1997)
- 「風土記」新編日本古典文学全集(5) 小学館(1997)
- 河内将芳「絵画史 料が語る祇園祭」淡交社(2015)

- 祇園祭 山鉾（ごしつ） <http://www.gionmatsuri.or.jp/yamahoko/naginatahoko.html>
- 奈良若草山麓三条小鍛冶宗近 <https://www.sanjyokokajimunechika.com/contents/category/about/>
- 箱根神社 https://hakonejinja.or.jp/hakone/#link_05
- 杉本圭三郎訳「新版 平家物語（四） 全訳注」講談社学術文庫 講談社(2017)
- 吉備津神社 <https://www.kbhitujinja.com/about/tachi.php>
- 尾脇秀和「刀の明治維新 「帯刀」は武士の特権か？」歴史文化ライブラリー 吉川弘文館(2018)
- 御寶劔遷座式行列図「穴守稲荷資料室別館」 <https://anamori.jp/annex.html>